

近世 舌 耕 文 芸 史 (下)

—— 東西寄席咄の盛況 ——

暉 峻 康 隆

1

烏亭馬馬を中心とする趣味的な文人の咄の会の盛況は、桜川慈悲成や石井宗叔など、半職業的な座敷はなし家を生んだ。しかし時の勢いは庶民と直結する職業的なはなし家を要求し、一定の場所ので一定の期間、聴衆をあつめ、木戸銭をとって披露するといふ寄席咄を成立せしむるにいたつた。

江戸でははじめ「寄せ場」といい、それを略して「寄席」といつたのであるが、上方では文化年中から市中に講釈場ができて、落語も講釈場へ出演したので、江戸で寄席というところを、上方では講釈場を略して「しやく場」といつた。もっとも幕末になると、上方でも講釈場と落語席(せき)は分離したと、ながく大阪に住んでいた「守貞漫稿」の著者がのべている。

さて、江戸で寄席をはじめたのは、大阪下りのはなし家・岡本万作であった。万作の素姓は明らかでないが、寛政三年二月に出府して、橋町二丁目の駕籠屋の二階をかりて講席をひらき、夜興行で評判をとつたので氣をよくして、寛政十年六月、神田豊島町

薬店に看板をかかげ、辻々に絵入りのピラをはって客をまねいたといふ。その時の絵ピラは写真のように、式亭三馬が「落話中興来由」に写しとつてゐる。これで見ると高座を設け、読書用の見台を用いている。なお三馬の注に、「頓作軽口噺と書たりしは万作老人にかぎれり。此頃専ら行はれし者也。此万作およそ二ヶ年あまり江戸諸方のヨセをつとめけるが、其後をしらず」とある。素姓は明らかでないにしても、江戸に前後十年いた間に、寄席という大衆演芸場の端を開いた功績は大



きい。

寛政十年といえは、後にのべる上方落語中興の祖とされている初代桂文治が、大阪坐摩社の境内で寄席をはじめた年であるから、万作は故郷の動きに呼応した

のかも知れない。

この万作の寄席開業にならい、当時二十二歳の山生亭花楽（まなしやうはながく）（のち三笑亭可楽）が、立川金升、春夏亭草露（あきげのくさる）・それに瓢我（ひょうが）という三人の素人のななし家を語らい、同じ寛政十年六月、下谷柳（しもやなぎ）の稻荷社内で看板をかかげて寄席をはじめたのが、江戸のななし家による席上のはじめであった。しかし何しろかんじんの花楽が当時は馬喰町の櫛屋又三郎、草露も櫛屋乙次郎で金升とともに咄がまずいので、まもなく廃業している。後に軍書読みとなった瓢我にしても当時は素人芸であったから、持ち咄の数もすくなく、五日限りで終ったと、三馬が「落話中興来由」に可楽の直話を伝えている。

とにかく寛政十年（一七九八）の寄席開きが、江戸における寄席のはじまりであるが、元禄の五郎兵衛・彦八・武左衛門の場合と同様に、市民社会における咄の趣味の流行を前提として、東西時を同じくして職業的はなし家が登場し、寄席がはじまっているのである。

慈悲成や宗叔とちがい、寄席の看板をかかげた最初の職業的な江戸のななし家、三笑亭可楽は、通称を京屋又三郎といい、馬喰町に住む櫛職人であった。三馬の「中興来由」に、寛政十年可楽二十二歳とあるから、天保四年（一八三三）三月八日に没した時は五十七歳である。

さて、旗上げに失敗した可楽は、いよいよ咄で身を立ようとして決意し、その年の九月二十八日、目黒不動に参詣して祈願をこめ、帰宅すると家業の櫛製造の道具をはじめ伝来の家財を売り払って武州越谷谷におもむき、十月一日から講席をかまえ、一人の

木戸銭十二文に定めて大いに流行したという。その後松戸で披露した時、山口又五郎というひいき客が、山生亭花楽という芸名は、どうやら生花の師匠めくから改名したのがよからう。ついでには中国の虎溪の三笑の故事に拠って、三笑亭可楽というのはどうだろうといわれ、江戸に帰ってから三笑亭可楽と改名したと、これも三馬が可楽から聞いた話を「中興来由」に述べている。

江戸に帰って三笑亭可楽と改名し、二度のお目見得の咄の会を催したのは寛政十二年のことであった。この時、烏亭焉馬（くろやま）・桜川慈悲成の老先輩の狂歌に自作の狂歌をそえた摺物をくばっている。その日のちの三遊亭円生の最初の師匠である東亭八子も賛助出演して好評であったというから、これは寛政十年以前の趣味的な咄の会とはちがって、職業的はなし家としてのおひろめの会であった。

それから四年目の文化元年六月、下谷広徳寺門前の孔雀長屋で夜席をもよおした時、彼は聴衆に題をもとめ、弁慶、辻君、狐の三題を得て即座に咄をしたところ、大いにうけたので、三題咄はその後彼の得意の演し物となった。「落語家奇奴部類」に「席上三題咄を初む、古今名人なり」とある。

この三題咄は、今ではもうほとんどやるはなし家がなくなったが、わたしの学生時代、昭和初年、寄席に通っていた頃には、まだ時たまお目にかかったものである。当時といえども演出にかわりはないわけだが、参考までに可楽の三題咄について書いた三馬の文章を引いておこう。

可楽は捷才頓智の人、つねに自作を講じて他人の糟粕をねぶ

らず。席に臨んで三題話を作る。最賞するに絶たり。聴衆に対して三つの題をもとむ。聴衆一人より一題を出して合せて三題となる。たとえば一人鼈カメという、一人火の消たる巨燧カマドという、一人唐山の遊女遊女という。これを合せて三題とす。三題を得て一回の落話はなしに作るを号して三題はなしといえり。衆口争って難題をあたう。可楽自若として須臾に頓作し、聴を驚かす事常也。俗にはなし家と自称して落話を講ずるもの概ね門人に属す。(中興来由)

三題咄も明治時代になると、寄席で中入り前に聴衆から題を得ておいて、最後に真打が登場してはなすようになっているところから見て、即座に作ってはなした可楽の才能のほどがしのばれる。

文化八年の春、可楽は再度の咄の会を两国柳橋の大のし富八楼で開いた。その時の配り物の団扇うちやうせんに、露の五郎兵衛や鹿野武左衛門などの軽口咄を抄録し、そのあと自作の咄をのせている。

今はむかし、やごとなき御方三浦の高尾がもとに通はせ給ひぬ。それが禿かぶに名をもみぢとよぶものありけるが、ある時もみぢをめされて、「コリヤもみぢよ。そちは何とてこのさとは身を沈めしぞ。てゝは血をわけし親か、母はそちをうみたるものかとありければ、もみぢ顔あかめつゝ、「イ、エ真間でおざりイす」というた。

軽口ばなしのいにしへぶりにならうて

三笑亭可楽述、

いうまでもなくこれは、紅葉の名所であった葛飾かっせきの真間ままに継つ

かけたのであるが、まことに洒落れた咄である。

寛政末から文化初年にかけて、ちやくちやくと職業化した江戸落語界に地歩をしめつつあった可楽も、まだ咄だけでは生活に不安があったと見えて、中橋上櫃町の自宅で塩せんべい屋を開業している。それについて式亭三馬が、「当時日本橋上櫃町に住す。七小町かき餅五色あられなどを露ひそぎたりしが、文化十年の頃より廃せり」(中興来由)といっている。しかし文化十一年正月刊の可楽撰「身振みまげ新あらた賀が多た八はち景けい」の奥附に、「三笑亭家製品目、七小町御かきもち、御口とりきみあられ、新製吉野かちん、是は当月より売出し申候。中橋上櫃町可楽店」と広告しているところを見ると、文化十一年までは開業していたことが知られる。しかし翌文化十二年には、江戸市中の寄席が七十五軒におよんでおり、おいおい門人の出入りもふえたので、副業の可楽店も十二年中には廃業したと見てよからう。

寛政末年を境として、文人の趣味として栄えた江戸落語は、庶民と直結した職業的な寄席咄へと成長した。寛政の改革によってそれまで江戸市民に笑いを提供していた洒落本と黄表紙が弾圧され、それぞれお涙頂戴の人情本や、忠臣孝子の活躍する御家騒動・仇討物に転向した結果、笑いの供給源をたたれた江戸市民の要求が、落語を公開せしめたのであった。それは改革後まもなく、享和から文化にかけて、十返舎一九の「道中膝栗毛」や式亭三馬の「浮世風呂」など、滑稽本という新しいジャンルが発生している事実から見てもうなずかれよう。焉馬・慈悲成の二大先輩はすでに老い、石井宗叔亡き文化文政度、今や可楽は名実ともに職業

化した江戸落語界の第一人者となったのである。

さて可楽の高座ぶりは知るよしもないが、自作の咄のくさくさは「山しよ味噌」（享和二年）、「東都真術」（文化元年）、「百千鳥」（文化五年）などをはじめ、天保二年刊の「十二支紫」にいたる十数部の咄本によって知ることが出来る。ここにその二三を紹介しておこう。

春の花むこ

こゝに梅の仙人と名づけたる古木、庭のすみの白い桃にはれて、姫ゆりを仲人にたのみ、金銭花を持参にむこ入りをしける夜、おりしも植木屋木ばさみをもってはいりければ、花どもこれをおそれて小さくなって居るゆへ、植木屋「ハ、ア、これは今宵は花むこの来るそうな。これを無情にきるでもない」と、すたすた帰りければ、仲人の花顔をあげて見て、「サア、このうちどなたもお開きなせへ」。（東都真術）

さきに挙げた真間の紅葉の咄といい、またこれといい、雅趣に富んだ上品な咄であるが、もちろんぐつとくだけた咄もある。

牛の御ぜん

むすこ「けふは友達にさそはれて、牛の御ぜんの開帳へまいりやす」といへば、おやじ、ふせうぶせうに小判を一枚出し、「牛の御ぜんへ行くなら、此一両で八百善か金ば楼へよって、なんぞうまいものでも食って、日の暮れぬうちに帰りやれ」。むすこ「かしこまりました」と道まで出ると、ぐつと気がかわって、青楼へおもむき、向島ではなくて、「友達やたば見めぐりの神ならば」と洒落れて、あすの朝帰ると、

おやじ「ヤイ、おのれは一夜とまりでどこの開帳へうせおつた」むすこ茶にうけて、「ハイ、まことにありがたいお開帳の奥の院までおがんでまいりやした」。おやじ「そして一両の金は何をおごってうせた」。むすこ「ハイ、豆をたべやした」。おやじ「ナニ、一両が豆をくつたたわけめ。それが牛の御ぜんか」といへば、むすこ「イ、エ、馬の御ぜんでございます」。〔種がしま〕

江戸前の洒落れた艶笑小咄である。

可楽が天保四年に五十七歳で没すると、門人の三笑亭芝楽が二代目を襲名し、弘化四年九月に没した。三代目は二代目の門人竜喬がつぎ、安政四年五月に没した。昨三十九年八月になくなくなった可楽は八代目である。

いうまでもないことだが、この時代の咄は可楽などのような実演者たちだけが作ったのではない。落語流行の機運に乗じて、山東京伝、曲亭馬琴、十返舎一九、式亭三馬など、一流の戯作者たちも競って咄を作ったので、すぐれた実演者の登場と相まって、江戸落語の全盛時代を招来したのである。なかならず「膝栗毛」の作者一九は咄本の数も多く、作品も軽妙で、今なお生きているものがある。

ためしもの

あるお侍、あらしの刀をととのへ、切れ味をためしみると柳原にいたり、野ぶせりの非人を見つけてひと刀切りかけしに此非人きやつといて伏伏したり。侍そうそうにかけて帰りますが、どうも心もとなく、今一たびためして見んと、そのあ

くる夜またまた柳原へ行き、うそそあるくと、非人ども見つけて、「コリヤコリヤ、みな起きぬか。ゆうべのお侍が又たゞきにうしやあがった」。(江戸前斬鯉)

この咄に多少尾ヒレをつけて、今でも「首提灯」のマクラに使っている。

ぬす人

あるひとり者の所へぬす人はいり、押入へかゝって、つづらをあけて見たところがなんにもなし。錢箱をひきだしてもかっぱなり。小筆筒の引出までのこりなくさがせども、なんにもなし。こいついまいましいと小言いひながら、がたひしすれば、亭主目をさまし、「ヤレ泥棒々々」とよばはる声に、ぬす人はそと片隅にかくれると、亭主蠟燭をともし見て、「さてさてぬすみおった。小袖ものこらず、錢箱の錢も金も皆なくなつた。此通り大屋さまへとどけよう」と出かける所を以前の泥棒、亭主が首筋をつかんで、「うぬふてえやつた。何もなくて金をとられたの、着物がなくなつたのと嘘をつく。そのぶんならぬ」とねじつけられ、「ハイハイ、御めんなさい。ついあのやうにしたのは、わたくしの出来心でござります」。(江戸前斬鯉)

この小咄に尾ヒレをつけてでき上がったのが現行の落語「花色木綿」(一名・出来心)である。サゲからいっても「出来心」の方がビタリなのだが、それを「花色木綿」というのは、大屋に盗難をうったえた男が、夜具だろうが紋付羽織だろうが帷子だろうが、裏は花色木綿とこたえる笑いが加わつたためである。

2

文化年中にいたって、江戸市中に寄席が五十軒をこしたということは、それだけのタレントが必要になつたということである。三笑亭可楽の門下に秀才が雲のごとく集まつたのは、自然のなりゆきであつた。その代表的な門人が、「落語系図」にいう可楽十哲である。朝寝坊夢楽、三遊亭円生、林屋正蔵、三笑亭可上、写し絵都楽、翁屋さん馬、狸々亭左楽、佐川東幸、石井宗叔(二代)船遊亭扇橋の十人であるが、今その中でも、とくに新風を生んで一家を成したはなし家を解説しておく。

まず筆頭は朝寝坊夢楽(一七七七一八三一)である。俗称を里見晋兵衛といい、麻布一口坂に生まれ、麴町の質屋の丁稚となつたが、浄瑠璃が好きで豊竹宮戸大夫の門に入り、登志太夫と名のつて浄瑠璃語りとなつた。狂名を流俗亭珍重という。享和三年(一八〇三)、二十七歳の年、可楽の門に入り、流俗亭玖蝶と名のつたが、やがて三笑亭夢楽と改め、「頓作はあらざれど人情に通じ、当世の風俗を穿つに妙を得たり」(中興来由)と式亭三馬が評しているように、自作の得意な人情咄で人気を博した。文化六年、勝手に夢楽を夢羅久と改めたことが原因で、師匠の可楽と不和になり、三笑亭の号を返上して、朝寝坊夢羅久と改めた。同じ年の八月二十八日、柳橋の大のし富八楼で開いた咄の会は独立のひろめを意味する催しであつた。摺物には烏亭焉馬をはじめ山東京伝、同京山、六樹園、式亭三馬などが詩歌文章をつらね、花をそえてゐる。「朝寝坊主人笑話にはまれ高ければ今日の

賑しきを思ひやりて、しろ水をながせる沢ははたるほど財布の尻もさぞ光るらめ」とは、山東京伝がよせた狂詠である。また夢羅久は「もよふせし螢狩には宇治拾遺はなしすゝめの時にあふ月」の一首を掲げている。当時は両国柳橋同朋町裏河岸に住していた。(中興来由)

文化九年三月、烏亭焉馬の門に入り、名も笑語楼夢羅久と改めたひろしの咄の会を再び柳橋大のし富八楼で開いたが、この頃から主として新作の長咄を披講し、人情咄の祖と称せられるにいたった。両国吉川町に住んだのはこれ以後のことで、天保二年正月十七日、吉川町で没した。現行の「浮世床」の一部、夢で芝居見物中、一つ糾にはいったいきな年増と馴れそめようとする所を起こされるといふ部分は、夢楽の小咄にもとづくという。夢楽の二代目は初代焉馬の門人立川金馬がつぎ、三代目は二代可楽門の可童が安政三年に襲名、四代目は四代桂文治門の文七がつぎ、五代目は初代三遊亭円朝の預りとなった。以下略す。

夢楽とならび称せられた三遊派の元祖三遊亭円生(一七六八一—一八三八)は、馬喰町の附店に住し、俳号を円里と叫んだ。寛政末年、三十歳の頃、東亭八子の門に入って東亭多子と称していたが、のち初代可楽の門に転じて東生亭世楽と称した。三馬の「中興来由」によると、ゆえありて破門され、山遊亭猿生と名のつていたが、さらに初代焉馬の門に入って立川焉笑と改めた。独立して三遊亭円生と名のつたのは、文化に入ってからと推定される。

円生は筆をとらなかつたので、その咄の内容がわからないが、

「落語家奇奴部類」に、「神田住、後に浅草堂前に住、芝居懸り鳴物入りの元祖なり」とあるように、身振り声色芝居掛り鳴物入りの芝居咄を完成した人である。劇通であった老師焉馬に負うところが多かったと思われるが、江戸歌舞伎全盛の時代的背景も無視できない。

芸もさることながら、円生は人となり温厚で、師をとるとび門下を愛したので、円橋、円馬、円喬、志ん生、竜生、馬生などのすぐれたはなし家とその門から出ている。二代目は門人円蔵がつぎ、その二代目円生の門人で、湯島住の左官職であった橋屋円太郎が、名人三遊亭円朝の父である。今の円生は六代目である。

二代目円生を円蔵がついだ時、もう一人の二代目候補者であった円太はころよからず、師匠のもとを飛出して旅へ出てしまった。それから七八年へた弘化四年の秋江戸に帰り、四谷の忍原亭へ看板をあげたのが、初代の古今亭志ん生である。志ん生は俗称を清吉といい、丁稚奉公をしていたが、落語好きで円生の門に入って円太と名のり、帰府後、志ん生と名のつたわけである。

当時すでに真打は続き物の人情咄をやるものとぎまっていたが志ん生はその人情咄が得意で、「お富与三郎」「小猿七之助」などの艶種で落語界を風靡し、八丁荒しの志ん生といわれたという。ことに「九州吹戻し」という人情咄は得意中の得意で、後の名人円朝も、志ん生のまねはできぬと、自分もやらず弟子にも禁じたほどであったと、関根黙庵がいつている。その「九州吹戻し」は初代春風亭柳枝も得意で演ったというが、そのあらまは次のようなものである。

江戸柳橋の裏河岸に、きたり喜之助という、歌三味線、踊りまてやれる小器用な独り者が住んでいたが、粋が身を食うで借金のために江戸におられなくなり、夜逃げして肥後の熊本へたどりつき、江戸屋という宿屋にとまると、亭主は江戸で見知り越しの男だったので、料理の手伝い、歌三味線の指南、座敷での取巻きなどして、四年も居ついてしまった。その間に百両ほども貯金ができ、故郷忘じがたく、主人のゆるしを得て江戸行き便船に乗ったが、時化にあつて玄海灘からあべこべに薩摩の桜島へ吹きもどされてしまった、というオチもない人情咄である。

多分、七八年におよぶ流浪の旅の体験が、志ん生の咄にまねのできない迫真性をあたえたのであろう。安政三年十二月二十六日没、享年四十八才。

ほかに円生門から出た初代金原亭馬生は、四代目坂東三津五郎の兄で、続き物の道具入り芝居咄得意とした。その門人の馬之助、馬風などの芸名は、今に伝わっている。天保九年八月二十六日没。

また初代三升屋小勝は円生の弟分で、三遊亭小勝と名のついていたが、七代目団十郎の声色がうまいところから、三升屋と改名したのである。

円生は三遊派の祖であるだけでなく、門下に多士せいせい、江戸落語隆盛の功勞者である。

円生とならんで一家をなした大看板は、初代林屋正蔵（天保十三年六月五日没・六十二）である。「落語家奇奴部類」に「三つ

目住化物咄の元祖なり」とあるように、また草双紙仕立ての自作「百歌撰」（天保五年）の巻末に、「元祖大道具・大仕掛妖怪ばなし、林屋正蔵」と看板をかかっているように、続き物怪談咄の祖である。本所林町に住し、文化三年に三笑亭可楽の門に入って業我と名のり、前座をつとめて可庵また笑三と改名した。文化十二年三月二十五日、中橋下榎町木屋忠右衛門楼上で最初の咄の会を開いた時、一時ではあるが二代目鹿野武左衛門を名のつた。

当時、正蔵が長谷川町に転宅すると、その家は元禄の昔、江戸仕形咄の開祖鹿野武左衛門の借家であることがわかり、家主をたずねて武左衛門の店賃の通帳の表紙を手に入れ、それを式亭三馬に鑑定してもらって珍藏し、二代目を名のるに至った次第を三馬に頼んで「林屋物語」という小冊子にまとめ、それを文化十二年の咄の会の際に配附したのである。

しかし右の一件については、三馬が「中興来由」に自作の「林屋物語」と、武左衛門の店賃通帳の写しを転載し、「正蔵改名より初て武左衛門が店賃之通に至るまで、すべて跡なきおのれがつくりものかたり也」といつているから、真打披露をかねた咄の会における宣伝のための趣向であったことがわかる。なにしろ正蔵は天保十三年六月五日に六十二をもって没した時、火葬にしてくれという遺言どおりにしたところが、棺桶に仕掛けてあった火花が人々を驚かしたという逸話の持主であるから、改名披露の一件も、彼らしい趣向といえる。

文政から天保にかけて、正蔵は大看板となり、西两国広小路御上り場前に定席を持ち、一門をひきいて「毎日朝四ツ時より夕方

迄」(百歌撰) つとめている。しかも彼は師匠の可楽よりも筆の立つ方で、自作自演の怪談や落語を著述刊行するという、一ぱしの戯作者でもあった。その多くは錦絵表紙の合巻仕立てであるが、文政七年刊の「先開而三升世界」を皮切りに、咄本十部、「怪譚桂河浪」(天保六年)、「怪談春鷗鳥」(初編天保九年)など、得意の怪談物の合巻四部がある。定席を持つ咄家の片手間仕事であるから、部数は多くないが、文才のほどがうかがえる。

鎌倉の諸寺諸山に開帳多くある中にも、ことに建長寺の靈宝はありがたき品あるとて、諸人群集して、おし合くするうちに、言立の者上下をためつけ、うやうやしく立出で、下にくくと諸人をしずめ、エヘンとせきばらひをして、ありがたくもこれなるは、清和源氏の正統六孫王經基公より十三代の後胤左馬の頭義朝公の三男の御公達、建久三年より將軍となられたもふ。しかる所正治元年正月十三日に御齡五十三才にて薨じ給う源の頼朝公の御しやれこうべなり。慎みて御拜あらましようと、うやうやしく台の上の羽二重のふくさをとりければ、みなく同音になむあみだ仏、なむあみだ仏という中に一人の男が、もしも言立のお方へお聞申したい事がござります。頼朝さまはかしらが大きいとうけたまはりましたが、思ったよりちいさうござりますといひければ、言立の人ぬからぬ顔で、是はこれ頼朝公十二才の御時のこうべなり。正藏作の草紙紙仕立ての咄本「戲靈宝」の巻頭におさめられたお馴染みのこの小咄は、明和九年刊の咄本「鹿子餅」の中の「借雪隠」に尾ヒレをつけた現行の落語「開帳の雪隠」のマクラとし

て、今なお用いられている。今の正藏は八代目で、同じく怪談咄・人情咄を得意としている。

可楽門の大看板として、初代船遊亭扇橋を逸することはできない。音曲咄はすでに初代石井宗叔もやっていたが、それを完成して一家をなした扇橋は、もと奥平家の家臣で赤坂に住み、はじめ常盤津兼太夫の門に入って若太夫と称した。文化六年、はじめて下谷の寄席吹ぬき亭を開いて音曲咄で売り出し、文政十二年四月十三日に没した。

扇橋の名は今日まで受けつがれているが、その門から出て柳派の開祖となったのが人情咄の祖と称した麗々亭柳橋(天保十一年四月二十一日没)である。初代春風亭柳枝(明治元年七月十七日没)は、この初代柳橋の門人で、兩國米沢町に住し、十六才で柳橋の門に入って前座をつとめていたが、人情咄の写実的な演出を工夫して妙をきわめ、「九州吹戻し」「三代吉殺し」などを得意とした。初代談州楼燕枝、二代目柳枝となった江戸派の俳人養守庵こと栄枝は、その門下である。

初代扇橋の門人中、色物の第一人者となったのが、初代都々逸坊扇歌(嘉永五年十月二十五日没)である。扇歌は文化元年に常陸国太田在佐竹村の医師園部玄作の家に生まれ、三味線ひきとなつて文政七年の秋に出府し、初代船遊亭扇橋の弟子となり、扇歌と名のつて寄席に出演するようになった。その頃よしこの節を転化して都々逸と称して歌いはじめ、江戸の人気を一身にあつめ、天保元年八月一日から、牛込の薬店亭で都々逸坊扇歌の看板をあ

げ、師匠の扇橋の口上で真打披露をした。当時上野輪王寺の宮に召され、「紅葉に寄する恋」という題を与えられ、「紅葉ふみ分け鳴く鹿さえも、恋にこがれて妻を呼ぶ」と即席に歌って御感にあずかったという。

扇歌の二代目は門人都川歌丸の妻女の歌女吉がつぎ、トッチリトンの前弾きをはじめたのが三代目をついだ扇三郎で、これは明治十三年四月に没している。四代目は東家小満之助が襲名し、五代目は大阪の人で本名は岡谷喜代松、初代燕枝門でつばめから五代目となったが、同人が明治四十五年五月二十九日に病没した後その名跡は一門の扇橋が預って十九年間絶えていたところ、昭和五年十月、扇橋の伴の柳亭小燕枝が六代目都々逸坊扇歌となった。今の扇歌は七代目である。

音曲咄を看板にした扇橋であったからこそ、その門から音曲師の扇歌が出たわけだが、初代可楽十哲の中にも、三笑亭可上、写し絵都菜、川島歌遊などという目先の変わった色物師が加わって、る点に注意したい。

三笑亭可上は「百戯述略」に、「百眼と唱へ、目かつらとも称へ候物をかけ、笑話相催し候は、文政の頃可上と申すものより相始め申候」とあるように、様々な目かつらをかけて落語を演じた奇道の咄家である。

写し絵都菜（嘉永五年十二月二十七日没）は小石川伝通院前に住した上絵師であったが、はじめ亀屋亀徳と号して落語や茶番狂言をやっているうち、享和元年の春、高橋玄養という人が、上野山下で阿蘭陀エキマン鏡と称して幻灯を興行したのを見て感心し

その技術を習い、上絵師のことであるから種々工夫して彩色法を發明し、天然色の幻灯を作り上げた。都菜はそれをうつしながら、唄や囃子を入れて怪談咄をやったので人気を博し、そこで可楽の門に入って都菜と名のり、享和三年春から寄席に出演するようになった見世物咄家である。この可上・都菜はともかく道具入りの咄家であるが、川島歌遊は盲人で、一人で八人分の楽器を奏したいわゆる八人芸の元祖であるから、都々一坊扇歌とともに、まったくの色物である。

こうして見ると、三笑亭可楽なくして江戸落語なし、といってもいい過ぎではないことがわかるが、またその可楽が取立てた寄席が急速に増加したからこそ、上演種目に右のようなバラエティを要求し、色物が登場したのである。

さてその寄席であるが、先にも述べたように、寛政十年六月、可楽が下谷柳町で看板をあげたのははじめとし、それから十七年目の文化十二年には江戸市中に七十五軒、文政末には百二十五軒になったという。ところが天保に入ると、同十三年、水野越前守の改革の結果、音曲鳴物を禁じ、咄と講釈だけをゆるし、しかも新規の席は取りつぶし、古い席だけを十五軒のこした。「此十五軒の株すこぶる高価となり、当時地獄で仏十五軒の寄場などいひ人々うらやみたり」（天言筆記）とある。なお同書によれば、弘化元年十二月から江戸中もこのようになり、寄席勝手次第御免となり、たちまち数百軒ができた。幕末の安政年間には、軍談の席二百二十軒、落語の席百七十二軒、各席百人ならし、座料一人前四十八文（大江戸都会荒増日勘定）という盛大さであった。寛政

末、初代三笑亭可楽の時代の寄席の木戸銭は十二文（中興来由）であったことを思えば、その四倍の四十八文は高いようだが、歌舞伎などにくらぶれば問題にならない大衆版である。入場料も安直な講釈や落語が、いかに庶民の娯楽としての役割をはたしつつあったかがうかがえよう。

3

さて江戸落語考の結びとして、可楽門でもなく、また一流の名にも値しないが、落語と江戸戯作との関係を端的に物語る存在として、咄家兼戯作者であった滝亭鯉丈・為永春水・為求春雅の三者についてのべることにしたい。

十返舎一九・式亭三馬につぐ滑稽本作者で、初編文化十四年刊の「道中栗毛後駢足」をはじめとし、「花暦八笑人」（初編文政三年刊）、「滑稽和合人」（初編文政六年刊）、「牛島土産」（文政七年刊）などの作者として、滑稽本の最後をかざった滝亭鯉丈（天保十二年六月没）は、そもそも咄家である。随筆「わすれのこり」に、「滝亭鯉丈、昔ばなしに音曲を入れ、また客より題を出させ、都々一節につくりてうたふ。戯員多くいずれの席にても当てざることなし」とあるように、のちに吉原の習間鯉七となった咄家の滝亭鯉丈門の人氣ある咄家だったのである。のち咄家をやめて、芸名をそのまま滑稽本作者となったのであるが、咄家としての体験が、彼を戯作者たらしめたことはいうまでもない。彼の代表作「花暦八笑人」初編の中の趣向の一つ、「飛鳥山巡礼の仇討」が、今なお落語の「花見の仇討」、大阪落語では「桜の宮」として、

ほとんどそのまま演ぜられている事実を見ても、そのことはなっとくできよう。

「東都人情本の元祖」と自他ともにみとめた為永春水は、滝亭鯉丈の実弟という説があるが、たとえば鯉丈作の「箱根草」二編の春水序に、「予が雅兄滝亭の叟」などと書いているところを見ると、実兄ではなく、世俗にいう兄貴分、弟分であったようだ。その春水は、「春水は始めせどりと云えせ本屋にて、軍書講釈に前座などを讀で世渡りにしたり」（著作堂雜記）と馬琴がいつているように、二世南仙笑楚満人と名乗っていた文政年間春水は、為永正輔の名で講釈師として寄席に出演していた。文政五年刊の楚満人作の合巻「総角結紫総糸」の自序に、「此頃聞たる夜講釈為永正輔が堀川清談（大岡政談）其儘こゝへ切はめて」とあるように、世話講談をやっていたようである。そして為永正輔の正の一字は、当時の大看板初代林屋正蔵の正をもらったものであろうという中村幸彦氏の推定（舌耕文芸家春水・日本文学大系月報六一）を支持したい。

文政末年には作者として書肆として多忙のゆえに、一時寄席から退いている。しかし人情咄と同巧異曲の世話講談をやっていたことが、「読本でなく歌舞伎にあらず、原来一家の文体は、楚満人一流の深山の桜」（文政七年刊「裕妻雪古手扇序」といい、「博く俗書を洗滌して世才に長たるゆゑに、よく人情をさぐり、野語俗言をまじへ、別に一家の文体をあらはせり」（文政九年刊「三人娘見序」という、彼の柔軟な天保期の文体や作風を生み出す原因であった素直な態度。

ところが「梅児誉美」（初編天保三年刊）の好評によって作者としての名声をかちえ、「東都人情本の元祖」と自称するようになった天保五・六年頃から、ふたたび寄席に出演している。天保六年頃の「出世娘」二編に、

それなる程やばなことがばかりいふが講釈師の常だが、良齋だの金竜だのといふのは世話ものばかり咄すから、下手な落し咄より意気なことがいくらも有やす

とあるように、狂訓亭金竜の名で出演し、世話にくだけた人情咄をはじめている。曲亭馬琴が「稗史外題鑑批評」（天保十年）で、「されば軍書講の掛行燈に、人情物滑稽作者の開祖第一家為永春水としるしたり。そを心ある聴衆も只含咲のみと文溪堂の話也」といつているのは、その後のことであろう。

さらにまた春水みずから語る看過しがたい一文がある。

そもそも春水が流行初し人情本といふものは、今より四十年のむかし、寛政のはじめつきた、浪華にひらけて嶋の内の楽屋を委しく著しつゝ、男女の痴情を細やかに恋の実意を尽せしものなり。されども時に不合や有けむ、幾程もなく花の香失せ、埋木のさまとなりしを残り多しといふ人あれば、心をつけて漸々に尋出せし実生の鉢の木、東に移す丹誠に、頓て開けし梅ごよみ、咲や此花難波津の最初に増る当時の流行、為永一家の風調となりぬ。（春色雪の梅・三編春水序）

どこまで本当かわからないが、まんざらのでたらめでもなからう。そこで四十余年の昔、寛政の初め、大阪で島の内の楽屋をくわしく描き、男女の痴情、恋の実意を描いた作者もしくは作品

は、ということになる。

するとここに时期的にも内容的にもそれに近い唯一の作品として、寛政十年刊の大阪の洒落本といつても五巻五冊本であるが、「十界和尚話」がある。巻一・修羅界、巻二・餓鬼界、巻三・地獄界・巻四・五・畜生界と分類して、大阪の岡場所の客と遊女の手管を描いている。しかしその中で島の内の妓が出て人情本らしいのは、道頓堀の芝居茶屋で堂島の米問屋山次郎と、島の内の遊女おのえが逢っているところへ、同じ馴染客源がおち合つて互いに嫉妬するという巻一の修羅界だけで、あとはがめつい大阪の客と遊女のかげ引きを描いたもので、人情咄どころではない。しかも江戸では同じ寛政十年に、より人情本的な梅暮里谷戯作の「傾城買二筋道」が出ているのであるから、「十界和尚話」はこのさうい問題にならない。

とすると、寛政初年から文化初年にかけて人情咄を長講した司馬芝叟（芝屋とも）のほかにはない。浄瑠璃作者であり歌舞伎作者でもあった芝叟は、寛政初年から人情咄をはじめたことは、芝叟が中国小説「売油郎独三占花魁」（今古奇観）を翻案した長咄「油」が、寛政十二年九月に近松徳三の手によって劇化され、「倅競廓日記」と題して角の芝居に上演されていることから知られる。その「油」を「浪速芝屋芝叟遺話」と銘うって、文化十三年に大阪で出版した説本が「売油郎」であり、今に伝わる上方落語の「油屋与兵衛」である。

この芝叟の長話について、西沢一鳳の「伝奇作書」が次のように伝えている。

長話として小説稗史を綴り、素人好人を寄せ、一夜読切講ずる事をし、此連中を組み、其社中に話の種をいふ人あれば、それを稗史に綴り、重ねての席に講じ、一夜の読切とはする事なり。長話数種あり、薺なづな(今絵本にあり熊沢が事跡)、油あぶら(唐の小説売油郎、今油商の狂言)、首かみ(島内の名妓首のぶがことを云)、櫛かみ(三光の櫛呉服屋十兵衛、郷戸亀次郎がはなし)、狗いぬ(佐野の経世が事跡源藤太夫と成るはなし) 此余数多あり。

寛政のはじめから大阪で人情咄をはじめた芝叟こそ、春水のいうその人であることは、右の文中にいう長話の一つ「首」が、春水のいう「嶋の内の築屋を委しく著しつづ、男女の痴情を細やかに恋の実意を尽せしものなり」に該当することによつても認められよう。

春水一流の人情本が、寄席における世話講釈の体験と、さらにまた大阪における人情咄の祖である芝叟の長話に負うところがあつたことは、今やうたがう余地はない。

春水の二代目をついだ門人の狂仙亭春笑の出身は、下谷の三味線堀の藩邸にいた対馬殿原藩士の染崎延房で、この人は戯作者としての二代目である。ところがここに三代目春水を名乗り、明治初期から十年代にかけて活躍している咄家がいる。

明治八年十月に出版された「諸芸人名録」の落語家の上等の部に、「湯島天神丁 山遊亭春水」とあるのがその人である。この三世春水について、明治十三年の二月から翌十四年五月にかけての「大阪朝日新聞」に記事が散見しているので、いささかその素

姓がわかる。三代目春水は本名を栄二郎といつて、東京日本橋木原店の玉研師の息子で、いささか俳諧などたしなんでいたが、戯作を志して仮名垣魯文翁に入門しようとして拒絶され、二世春水の染崎延房から無理やりに狂訓亭の号をゆずり受けて落語家となり、湯島天神町一丁目に開言社をひらき、社員に春馬、春友、春暁等を擁し、すっかり為永一家を気取っている。明治十三年の春から十四年の夏にかけては大阪や名古屋方面に巡業し、「平仮名娘演説」や初代春水作の「春色梅曆」、新聞連載中の「彩衣廓余香いろはなごころあまかぐら」などを演じて好評を博している。社員の春馬、春友、春暁らも大阪に来て西洋落語などやっている。

春水門の人情本作者で、天保九年刊の「春色雪の梅」(初・二編)と「春色初旭廻出はつあけまわい」(天保十年)、それに刊年未評の「貞操深雪松ていそうふかゆきまつ」の作者である為永春雅しゆんが(嘉永四年六月十日没)も、本職は初代土橋亭りう馬とよはしりうまという咄家である。

彼ははじめ初代船遊亭扇橋門であつたが、のち初代三遊亭円生門の司馬竜生の門に入り、はじめしん馬しんば、のちりう馬りうまと改めた。りう我りうが、りう幸りうさい、りう助りうすけ、りう吉りうきち、りう志りうしなどの門人もあり、晩年の弘化・嘉永の頃は、まず一流のはなし家となつてゐる。写真の「大寄鑑」(中村幸彦氏蔵)は弘化・嘉永頃のものと推定されるが、当時の一枚看板・古今亭志ん生の大関について関脇の位置をしめてゐる。なお前頭に名をつらねてゐる橋屋円太郎は、三遊亭円朝の実父である。

当時しん馬といつてゐた土橋亭が、かたわら戯作を志して天保



七年に春水の門をたたいてから二年目の天保九年に、春水の門人としては最初の作品（初編春水序）「春色雪の梅」（初・二編）を出している。しかし、「為水の門葉多き中に、春雅の作意尤勝れたり。然ど文段に疎きゆえ、其誤少からず。予閲し悩む事多くあり。」（雪の梅三編下・春水跋）と春水がいつているように、趣向はうまいが文章はまずかった。それが見るべき作品は前記の二作という、まずしい結果となった原因であろう。

咄家としては春水とは比較にならないりう馬であったが、文筆の才がまずしいために作者として大成せず、話者としては成功しなかった春水は、文筆の才と努力が相まって、人情本という近世

小説の最期をかざるジャンルのにない手となったわけである。いずれにしろ三馬以後の江戸戯作も、咄と密接な関係を保っているという事実を、わたしは指摘したかったのである。

4

江戸における寄席咄の盛況についてのべたので、まったく同時に出発した大阪の寄席咄を展望することにした。

二代目以後、京都に移った米沢彦八の名跡も、安永の頃活躍した四代目でたえた。その頃大阪では、知識人の余戯として宝暦の頃から行われていたわが国の笑話の漢訳や中国笑話の調訳に引きされて、点取りの会咄が流行しはじめ、寛政の頃には同じ会咄でも半ば職業的な咄家が主催するようになった事情については、すでに前章において述べた。寛政の頃、同好の士を集めて、自作の人情咄を一夜読切りで講じた司馬芝叟も、その一人であったわけである。

そういう時期、寛政四年五月に、京都の松田弥助という咄家が大阪に下って来て辻咄をはじめたのは、一向に氣勢のあがらない京都に見切りをつけ、会咄が流行し、半職業的な座敷咄の名手まであらわれた大阪の活況に目をつけたからであろう。

寛政四年五月、京都、松田弥介下ル。此頃までは座敷咄として北の新天地大万、島之内に筆彦など名人なりしが、弥介京より下りて、御霊刃にて浮世斬を初む。尽しもの、洗濯所の訴書など聞く人興ず。此風儀軽口物真似に在いすれ共、諸人よろこび、弟子新町桂文治よりいよいよ賤しく相成れども、近世

専ら浮世断は此風儀を学ぶ。

と「摂陽奇観」が伝えている。庶民生活を活写したので、浮世断と称したわけであるが、それは江戸で浮世師の身振り声色芸が式亭三馬の滑稽本や初代三笑亭可楽の咄の基本となったのと、まったく同じ過程をふんでいる点が興味ふかい。もちろん江戸の場合と同様に、単なる物真似芸を創意に富んだ趣向で盛り上げたところに弥助の工夫があったわけである。

「摂陽奇観」は、さらに出版された「洗濯所の訴書」も転載している。その本文の一部を転載しておこう。

洗濯所より御申出し之事

一、虱共之義は先年相改め申置候通り、不実商売其外非人本性者など取付き渡世可致之所、近年甚みだりに相成り、貴人高家并ニどんすちりめんのい夜着ふとん、又うこん染のいをはゞからず徘徊致候段、もつての外ニ候。其上春先は花見など々名付け、けんぞくを召連れ上ばい致候者共あまたこれ有り、せんしよ者又は女郎などは別して赤面いたし候段相きこえ、甚おごりがましくふらち成る事に候。これによつてまへまへ洗濯所より申おき候へ共、こゝろえちがひの者共これ有り、縫目をくゞりかけをかくし候段、甚もつて不埒なる事に候。以来は肌着の裏々は申すに及ばず、はしばしにおいてもみだりに子をうみ付候事相しれ候はゞ、虫眼鏡をもつて相あらため、親虱はもちろん、じうるい縁者にいたる迄、洗濯所において煮え湯をかけさせ、みな殺しに致すべきもの也。公儀の申渡し書に擬した右のような洗濯所よりの触れ書に対し

て、同じく公儀への訴状に擬した「蚤仲間惣代、一足屋飛助」の「乍恐奉願上候三箇仲間より口上書」を配して笑いをとっている。弥助には二代目弥助、松田弥六、松田弥七、松田弥八などの門人があつて、露の五郎兵衛や米沢彦八などと同様、盛り場で辻咄を興行したのであるが、それについて西沢一鳳が次のように述べている。

浪華にて松田弥七、辻講釈の如く市中の軒にて高き台の上に乗り、前に台を置きて拍子木を鳴らして聴聞の願をはずさせ
……。(皇都午睡)

とあるように、机に向つて拍子木を鳴らすという、今に伝わる大阪落語の演出法は、松田弥助一門によつて創められたようである。

初代松田弥助の生没はわからないが、彼の落語史上における業績は、最後の辻咄家として大阪落語中興の機運をもたらすと同時に、門人の中から上方寄席咄の祖である初代桂文治（文化十二年十一月二十九日没・四十三）を送り出したことである。明治三十三年四月、二代目桂文枝の発起で、大阪西成郡天下茶屋に建てられた「桂塚」の碑文（落語系図所載）によると、文治は摂津国西成郡柴島村の人である。はじめ京下りの弥助にしたがつていたが寛政十年といえは江戸で大阪下りの岡本方作と初代三笑亭可楽が寄席をはじめた同じ年に、二十六才で坐摩社の境内ではじめて常打ちの寄席の看板をあげた。寛政六年説もあるが、「落語系図」の「席上の元祖なり、寛政十年より始む」とある説が、年齢から

見ても信ぜられる。前に引用した「皇都午睡」も、「桂文治は別に咄小屋を建て、日々新奇を咄出して一派を立てたり。後に道具鳴物を入れ、此道の名譽と称す」といつている。

はじめて寄席の看板をあげて文治が売り出した咄はといえは、「落語系図」に「昆布卷芝居、あんま芝居、蛸芝居、竹光等は皆此の文治の作なり」とあるように、音曲入り芝居がかりの落語であった。「昆布卷芝居」は歌舞伎の「敵討二嶋英勇記」(一名・敵討巖流島)の雪中山の場を利用した咄であり、「あんま芝居」は「箱根靈驗覺仇討」の箱根山中施行の場を落語化したものである。また同書に「大物の内に竜田川、素徳院、口合小町等あり、其の内に反古染などは天下第一品の作なり」とあるが、これらはいずれもできのよい現存の咄である。

「竜田川」は別名「百人一首」、東京では「千早振る」ともい、宝曆十三年刊の「風流戯註百人一首虚講釈」の一話を改作したものであり、「素徳院」は東京では「皿屋」または「花見扇」といい、同じく百人一首の素徳院の詠歌「瀬をはやみ岩にせかるゝ滝川のわれても末にあはんとぞ思ふ」に拠った落語で、故桂三木助がよく演っていた。また「反古染」は明和五年京都板の「軽口春の山」巻三の「異名すき」という小咄を、艶笑落語に仕立てたもので、サゲは「人こそ知らねかわくまもなし」といえはわかるだろう。

また「皇都午睡」に、「桂文治の落し斬は、臍の宿替と云ふ書あれば爰に略す」とあるが、その「新へその宿替」は半紙本五冊、各巻七章、晩年の文化九年正月に大阪で出版されている。次の一

話は巻四の「加賀米」のあらましである。

下女の寝所へ亭主が毎晩夜這いに行くので、女房が腹を立てて下女を二階に寝かせると、ある夜また二階へ夜這いに行つたので、女房は下からハシゴを引いておく。程なく夜もあけハシゴがないので亭主が二階の下り口でまごまごしている、下女はしきりに空腹をうたえる。下では女房が朝食をうまそうに食っている。亭主と下女が顔を見合せて吐息をついていると、下から女房が何やら紙切れをほうり上げた。見ると「おきて見つ寝て見つ寝やの広さかな」と加賀の千代の句を書付けてあった。亭主が感心していると、隣の内儀が気の毒がって握り飯を物干からさし入れてくれたので、とても御世話ついでに、この書付けをカカに渡して下されとたのむ。女房がひらいて見ると、「けさかゝにはしごとられてもらひ飯」。

「反古染」といい、「竜田川」といい、この咄といい、桂文治は風雅と艶笑をたくみにミックスして、幅広いファンをつかむことができたようだ。さすがは江戸の可楽に対して、上方落語中興の祖といわれるだけのことはある。

文治の二代目は、初代の実子であり門人であった文吉が、文化十二年に初代が没して程遠からぬ時期につき、三代目は二代目文治の門人桂文鳩の弟子の九鳥がついだ。ところがこの三代目にいたって、文治の名跡が上方と江戸に分かれ、江戸の三代目文治(のち文楽・楽翁・大和太極)が、江戸桂派の始祖となった。それについて「落語系図」の説をまとめると、こういふことになる。

江戸文治ははじめ二代目三笑亭可楽の門人で房馬と称していたが、京都へ上つて江戸咄扇松の門に入り、扇勇（一説に扇遊）と名のつた。ところが師扇松の妻は、二代目文治の妹、すなわち初代文治の娘ゆき（一説にかう）であつたが、扇松の没後、門人扇勇の妻となつた。ところが文政十年に、当時まだせい馬と称していた三代目可楽が上京した時、扇勇を取持つて三代目文治にした。その文治が江戸に帰つて大成した後、桂文楽（初代）と改名し、さらに嘉永四年九月に楽翁と改名した、というのである。

それについて、江戸の二代目扇橋が嘉永元年に撰した「落語家奇奴部類」に、初代文楽になつた江戸文治を四代目としているがこれは資料に照らして認められない。

ところで、初代文治の娘であり、二代目文治の妹である師扇松の妻と一緒になつた扇勇が、三代目文治を襲名し、やがてまもなく上方にも三代目文治が生まれた。いきさつについて、前田勇氏の説を支持したい。二代目文治が没して三代目をつぐべき人物がなく、名跡が宙に迷つていた文政末年にせい馬（三代目可楽）が上京し、初代と二代文治につながる縁のある扇勇を取持つて三代目をつがせたが、その名を江戸に持ち去られたので上方はおさまらず、二代目文治の孫弟子九鳥が三代目文治をつぐことになつたのであろう、という推定はきわめて合理的である。上方の三代目文治襲名の時期は、江戸文治が京都を去つてまもなくのことであつたと思われる。

さて上方の三代目文治のあとは、三代目の門人の慶枝がつぎ、五代目は初代文治門の桂生瀨の預りとなつた。

それに対して江戸の文治は代々続き、四代目は三代目文治の養子となつた上方下りの司馬才賀がつぎ、五代目は四代目の門人文楽（はじめ文太郎）がつぎ、四代目文治の悴で六代目をついだ由之助こそ、幕末から明治末までやく六十年の高座をつとめ、「下谷山野は山かつら、桂文治ははなし家で」と尻取り歌にうたわれた文治である。

さて上方の文治は四代目までで、五代目は預りとなつて立消えていたが、明治四十一年に二代目桂文団治が東京の六代目文治から七代目をゆずられ、一時大阪に移ることになった。同年の十月東京の文治も下阪した席亭での披露に、東京文治は大和太極に、二代目文団治は七代目文治に、米団治は三代目文団治に、襲名の挨拶を同時にした。三人の当日の発句、

あしの根やなにはを鷹の力草

（大和太極、六十六歳）

山茶花や東うけなる日の暖み

（七代文治、六十一歳）

初あられ広げて受ける扇かな

（三代文団治、五十一歳）

七代目文治をついだ二代目文団治は、浪花三友派の重鎮で、当時「三十石を首尾一貫して語り得る者、ついに文治を最後の一人とせざるべからず」といわれた落語家である。（上方・五号）

しかし八代目はまた東京に移り、昭和三年九月に七代目文治が没するとまもなく、三遊亭円馬の門人小円馬が八代目を襲名、九代目は昭和三十五年に九代目翁家さん馬がついで今なお健在であ

る。なお幕末から明治にかけて、初代笑福亭松鶴とならんで活躍し、明治期における上方落語の黄金時代を現出する基礎を築いたのが、上方の三代目文治門の初代桂文枝であることを申し添えておきたい。

さて、江戸の三笑亭一派に呼応して抬頭した上方落語は、桂派に続いて文政の頃に笑福亭一派が、さらに林家一派が登場し、幕末から明治初期にかけて活躍した、というのが大勢である。

笑福亭一派は、文政年間にあらわれた京都の咄家初代笑福亭吾竹を祖とするが、実はその師匠は松富久亭松竹といい、吾竹の代になってそれを笑福亭と改めただけであるから、松富久亭松竹を祖といふべきであろう。「落語系図」によれば、松竹は京都における当時の大人で、現行の落語「松竹梅」、「初天神」、「立切れ線香」（東京では「たちきり」）、「千両蜜柑」、「猫の忠信」（東京では「猫忠」）、「網舟」などはこの人の作であるという。右の咄のうち「初天神」の原拠は、江戸の咄本「聞上手」（安永二年刊）初編所収の小咄「胤」であり、「千両蜜柑」の原拠は「鹿子餅」（安永元年刊）所収の「蜜柑」であることは、前章においてすでに指摘しておいた。

鳴物入りの咄を得意とした門人の初代吾竹もまた作者で、現行の上方落語「こぶ弁慶」や「盲景清」はこの人の作である。ただし「盲景清」の原拠は、初代米沢彦八作の「軽口大矢教」（享保刊）所収の「祇園景清」である。この一派から、幕末の安政・慶応の頃から明治初期にかけて活躍した初代笑福亭松鶴が出てい

る。

桂派・笑福亭派に続き、天保以後の幕末における上方落語界を牛耳ったのは、林家正翁の一派であった。「落語系図」によれば、正翁はもと備中国芝守城主木下淡路守の茶坊主であったが、芸事が好きで武士を捨て、江戸へ下って初代林屋正蔵の門人林屋林蔵の門に入り、菊蔵と名乗った。のち京都にのぼって正三と改名し江戸の林屋と混同しないように林家と改めた。天保の頃には菊枝と改め、晩年は正翁と号した。咄のほかによし、このを売物にして、京阪随一であったという。門人も多く、その隆盛ぶりは江戸の林屋一門をりようがした。

以上のほかに立川を名乗り、芝居がかりの怪談咄を売り物にした一派もあった。「落語系図」の初代立川三玉齋（はじめ三光）の条に、「立川の先祖は俳優立川伴五郎と云ふ歌舞伎役者なり。其子に三五郎と云ふ人あり。立川家の家元で、芝居噺の上手の家元なり。四ツ谷怪談、かさね怪談、幽霊物の元祖なり。其頃大いに流行し、其後道具入にて角芝居、中芝居等にて興行なす。」とある。

いずれにしても寛政から幕末にかけて、江戸も上方も寄席咄の時代をむかえ、ともに庶民の娯楽として栄えているのであるが、江戸にくらべて上方は、京都と大阪に勢力が分散していたせいもあって、劣勢はおおえない。しかし明治期に入ると、東京落語にまさるともおとらぬ全盛時代をむかえている。

附記 岩波書店の「文学」（三三三巻九号・一〇号）に発表した

「近世前期・舌耕文芸史」とあわせて御覧いただきたい。